



六
花

12

2022

りっかはいくかい

実家全焼



山田六甲

お母ちゃん内子の家が焼けました
火事跡の柱は何の墓標なる
家の火事亡き姉弟天知らずや
火事になり実家に残し置きしもの
冬たちぬ猫のご馳走まだ残り
帰り花 倭^{やまと}建^{たける}命^{いのち}の母の墓
志ぐれてふ菓子は 大洲に紅葉山
領^ひ巾^れ墓^ぼや紫を濃く帰り花
初氷向井去来のごとくかな
人恋ふる時雨の城下町に来て

色 変 え ぬ 年 寄 松 の 別 府 郡
も み 殻 に 眠 る 冬 薔 薇^{そうび} の 園 は
ほ ども な く み な 鴨 に 寄 る 昼 餉 前
城 垣 を 支 ふ る 黄 葉^{もみぢ} 紅 葉 かな
冬 に 入 る 城 主 点 前 の 小 井 戸 垣
初 鴨 の 粘 る く ち ば し 漱 ぎ^{すす} け り
年 越 の そ ば な ど 啜 る 机 かな
春 を 待 つ 樹 な ら ば 枯 れ て 星 数 ふ
抑^{おさ}々 と い ふ 意 面 白 冬 ご も り
大 年 の 日 を 背 負 ひ た る 播 磨 富 士

月ほのと人の希望に似てをりぬ 谷口一献

つきほのとひとのきぼうににておりぬ

この句で思い出すのは「ホトトギス」京極紀陽の「ねんねこやあかるい方を見てある子」と通っていると思った。山田佳乃さんは「京極紀陽の百句」の中で「明るい方を見ている子は希望であり、守らなければならぬ存在」と評している。太陽でなく月のほのとした光に希望を見た一献は現在とある財団の奨学金の仕事に携わっている。実に相応しい情を読者も賞っているような気がする。

(六甲)

雪嶺抄

入口いづこ ◎ 笹村 政子

秋天の入口いづこ鳶の声

神鏡へ日を照り返す稲の花

銅鏡の打てば色なき風にのる

秋高し流るる雲のあらばなほ

大阿蘇の花野に母をあづけけり

花野ゆく影重ねては三姉妹

逝きし子のメトロノームや鉦叩

三日月や傾ぎてはづすイヤリング

落鮎の影は一途に下りけり

胸疼くほど大いなる須磨の月

秋天の入口いづこ鳶の声

しゅうてんのいりぐりいずことびのこえ

秋晴れの天を舞う鳶はまるで秋の天への入り口を探しているようだ、という。鳶の立場になって、その発想まで観入到達できた政子の若々しき精進を讀みたい。鳶は入り口は何処だ？と鳴くピーという声まで聞こえてきそうに生き生きとした表現になった。秋天には、目には見えないバリアが存在しているという。目に見えない物が見えるのも俳句の力。見えていて見えないものが、反対に見えていなくても見えるという俳句哲学の深さ。

月の言葉 ◎ 志方 章子

蟪蛄の四肢もて掴む我が腕
 虫籠に動くものなき朝かな
 鈴虫を逃してやりし狭庭かな
 母のぬぬ淋しさ未だ虫の秋
 秋桜母を想へる我も母
 言葉などいらぬひと時星月夜
 草相撲兄は涙をこらへけり
 秋めけり山下清展を出て
 新涼や身の内までも洗はるる
 月仰ぎなんの言葉も授からず

月仰ぎなんの言葉も授からず

つきあおぎなんのことばもささずからず

月の句を授かりたいと、じつと見上げるが何の感興も
 涌いてこなかったのだろうか。いやそついでに事ではなく、
 しつかりこの句を授かったのだから、一応成功したにち
 がいない。向井去来は、最初「岩鼻やここにもひとり月
 の猿」という句を考えていが、岩鼻をのぼり月を見に行
 くと、そこには先客がいた。という意味で作ったそうだ
 が、芭蕉は「岩鼻よ、ここに私が月の客としてゐるぞ」と
 という意味の方がよいと言った。掲句も技巧をつくさず
 自然の心を十七音で写したのが良い結果となった。「虫
 籠」の句もよい。蟪蛄はカマキリのこと。

はまなす抄

村芝居 ◎ 升田ヤス子

月白やかはほりの数ただならず
 いくたびも二階へ月の供物見に
 月へ投ぐおひねり村の子の歌舞伎
 月光に溺れて月下美人かな
 望くだり月下美人のうなじかな
 畑隅のついで作りの鶏頭花
 葉鶏頭群れ赤備へ黄の備へ
 皺深め祀り当番地蔵盆
 工芸茶色なき風の中華街
 なつかしき声初鵲とわかるまで

炎帝につひに召されてしまひけり

えんていにつひにめされてしまひけり

御師への哀悼の句。生涯敬愛していた恩師が病魔と闘
 いながら、ついに酷暑の中、天に召されてしまった、ま
 ことに残念だ。と悔いの一句を捧げた。村上氷筆さんは
 川柳界の重鎮であった。

「夜は星をかぞへてをりぬ稲の花」は、

一句の中に主題がない場合（星を数えている）のは作
 者のことと解してよい。稲が花をつけると、夜は星と会
 話を交わしながら実になっていくのである。また、稲
 妻は稲を結実させるのに役立つと言われている。夜に星
 の数を数えながらおのずと稲も数を増やして一粒万倍に
 増えていく。

つひに ◎ 善野 行

恩師・村上氷筆先生

炎帝につひに召されてしまひけり
 夜は星をかぞへてをりぬ稲の花
 鶏頭や屋台庫開く季の来て
 濃き色に凝る鶏頭の太さかな
 古町や闇の祠に月の客
 酒肴尽きてしまひし居待かな
 月白に常の家路を愛しけり
 路地抜けて松の間に月の池
 使ひ手の月にたかぶる居合かな
 堰落ちて滝なす音の澄みにけり

炎帝につひに召されてしまひけり

えんていについにめされてしまひけり

御師への哀悼の句。生涯敬愛していた恩師が病魔と闘いながら、ついに酷暑の中、天に召されてしまった、まことに残念だ。と悔いの一句を捧げた。村上氷筆さんは川柳界の重鎮であった。

「夜は星をかぞへてをりぬ稲の花」は、

一句の中に主題がない場合（星を数えている）のは作者のことと解してよい。稲が花をつけると、夜は星と会話を交わしながら実になっていくのであるう。また、稲妻は稲を結実させるのに役立つと言われている。夜に星の数を数えながらおのずと稲も数を増やして一粒万倍に増えていく。

別府抄

かはほり ◎ 廣畑 育子

寝転べば足の先まで植田風
 田のそばに住むしあわせや虫すだく
 かなかなと詩吟聞こえてをりにけり
 樗の実まだ青々と入江かな
 かはほりの日暮れて草の匂ひせり
 子の苞の夏の赤福よく伸びる
 路地の陽にふと揺れをりし鬼やんま
 記録的豪雨と云ふに蝸牛
 鈴虫の声の枕辺清しかり
 法師蟬師にたづねぬるオノマトペ

かはほりの日暮れて草の匂ひせり

かわほりのひぐれてくさのにおいせり

かはほりは蝙蝠（コウモリ）のこと。コウモリの語源には、川辺の洞窟（かわほら）などにいることから、また川を守るものの意味で「川守（かわもり）」や、蚊を食べることから「蚊屠り（かほり）」から来ているという。この句の眼目は日暮に、草の匂いが強くなったことへの気づき。この現象は蒸し暑い夏の夕暮れに起こると。つまり草いきれのするのも昼間より夕暮れのほうが噓せるような匂いが立つという発見。昼間に草草は強い日差しに水分を奪われるが残っている草の水分が発散する夕方悪臭を放つ、と。その中を蝙蝠は飛び交い虫を捕獲するから気分的にも悪臭が漂うのかも。

蝉しぐれ ◎ 永田万年青

向日葵の半分は焦げ伏せにけり
 油蝉声を限りに鳴く一樹
 一匹の飛び立ちて止む蝉しぐれ
 汗だくの身体岬の岩に坐す
 薄暑かな幾度も眼鏡ずり上げて
 着流しの年季入りたるをどり唄
 手をつなぎ飛び入りの子等盆踊
 夕月や青春の歌口ずさみ
 鎮もれる一湾の舟照らす月
 露天風呂手足伸ばして月を浴ぶ

一匹の飛び立ちて止む蝉しぐれ
 いっぴきのとびたちてやむせみしぐれ

一匹の蝉が群れからはじかれるように飛び立つと蝉しぐれが止んだ。蝉の形態はよく分からないが、なるほどそういうことがあると思う。飛び去った蝉の影響か、彼の行動は蝉の群れを制御しているの不思議な自然の生業。鳥とか空を飛ぶ物にはそういうことがあるようだ鳥の群れも一羽が集団を総ているようにも思える。万年青は俳句の中で自然の不思議に気が付いた。足が不自由なので五感のうち耳を働かせた。

秋の昼 ◎ 出口 誠

秋の日を受けて車の真つ赤なり
 乾燥機回り続ける秋の昼
 ゆつくりと暗くなりゆく秋の空
 マスク取り舌を出したる秋の朝
 火傷した皮ふの厚さよ秋の昼
 秋の昼やけどのあとをなぞりけり
 秋の昼チーズで酒を飲んでをり
 秋の昼次男は義母の家にある
 仏壇の掃除を終へて秋の昼
 誰からか電話の来たる秋の昼

仏壇の掃除を終へて秋の昼
 ぶつだんのそうじをおえてあきのひる

仏壇のほこりが目立つのは春だが、秋日の中の仏壇の埃や汚れも目立つのだろう。思い立って掃除をした。そのことが心身ともに爽やかになったと思われる。外へでて秋空を仰ぎながら両手を伸ばして伸びをしている状態がうかがえる。仏壇の掃除をしたときに心の汚れもすっきりした気分の秋の午後。もう一句、秋の空が「ゆつくりと暗くなる」と感じたのが、夕暮れが遅いと思ったのか、通常は秋の夕暮れは夏場より早く暮れるというのが通常だが、この句は個入の主観でゆつくりと暮れているのだろう。一般に通じる強烈な主観は個性だが、一般に通じない主観はただの主観になる。

団子汁 ◎ 田尻 りさ

浜木綿の盛り灯台見上げをり
 たわわなる百日紅の揺ぎかな
 高層のビルに鈴虫鳴き狂ふ
 さるすべり神戸も悲し熊本も
 終戦や毎日団子汁ばかり出て
 素裸一人居だけに出来る業
 秋立ちぬ笙簞築と銅鑼の音と
 夜店より踊り出でたる阿波男
 新米の五キロを前歯で提げにけり
 竹箒投げ上げ落す群れ蜻蛉

酒香抄

月ほのと ◎ 谷口 一献

月ほのと人の希望に似てをりぬ
 兵庫津の太古の闇の無月かな
 満天の星に囲まれ霞む月
 親知らず抜き血まみれの秋うらら
 片頬の腫れ七日目の夜長かな
 御霊祭の案内届く秋半ば
 赤青の水の重さの和梨かな
 木漏れ日の嵯峨野に刺さる竹の春
 小春日の温めてくれし草履かな
 手鏡に眼尻捉へて秋深し

終戦や毎日団子汁ばかり出て

しゅうせんやまいにちだごじるばかりで

団子汁とかいて九州とくに熊本では「だごじる」といい、いわゆる昔のすいとん。今は観光客が名物「だごじる」を好んで食べる。だが作者は戦後まもなく「すいとん」ばかり食べさせられた、つらい思い出を言っている。九州ばかりでなく、私の故郷でも子どもの頃は団子汁をよく食べさせられた。今では懐かしい家庭料理だが、昔は飽き飽きしていたのだろう。時代がかわれば食べ物の嗜好も変化してくる。同時作、笙簞築は「しょうひちりき」と読み、雅楽の楽器である。雅楽では、笙（しょう）、龍笛（りゅうてき）と簞築（ひちりき）をまとめて三管と呼び、笙は天から差し込む光、龍笛は天と地の間を泳ぐ龍の声、簞築は地に在る人の声をそれぞれ表すという。それぞれの音声（おんじょう）が秋の立つ気配を感じさせてくれた。

月ほのと人の希望に似てをりぬ

つきほのとひとのきぼうににておりぬ

人の希望のような月の光を見た、「ほのと」にたしかに希望のような光を見ているというのが印象的。人の希望とはたしかに一献のいう通りかもしれない、とおぼろげな納得を投げかけられる。「似てをりぬ」と断言を避けたのにも理由がありそう。言葉の幹旋でもある。この人の汪洋とした雰囲気はまさにこの句に集約されているだろう。夢風撰。

介護度 ◎ 江見 巖

庭園の料亭に入る作り瀧

介護度の上がりて行くや盆支度

幽玄の入ることなき風の盆

迎鐘土踏まずには届かざる

リヤカーの声の小さく鱒売

たはごとを田に捨ててくる赤とんぼ

ベンガラのように紅くなる残暑かな

名物の太刀魚巻やかぶりつく

丹波より釣瓶落しの日本海

魯田や手を広げくる鉄格子

介護度の上がりて行くや盆支度

かいごどのあがりてゆくやぼんじたく

江見さんの家庭を知らないから、勝手に鑑賞する。盆の支度をするのは生身魂なのだろう。年齢を重ねると、物事をさっさと出来ない。この主人公もだんだん身体が不自由になって盂蘭盆の支度も思い通りに進まなくなってきたているせいかな、見ていてはらはらするのかも。そういう年齢に達した親などは、盆の支度をしてもらう方の生きた魂になって盆の労いを施されるようになった。だが昔はこのような年齢に達すると「櫛山節考」のようにおにぎり一つと飲み水竹筒一本で山に捨てられていた。その人たちを生身魂として祭って供養していたというのが考えられない。昔は非常に徹しないと生きていけなかった時代も。姥捨伝説をふと。

須磨の奥抄

コッコデシヨ◎草場つくし

盆踊り遅れ遅れの手の動き

原爆忌日差しの中の登校日

爆竹の中一人曳く盆の舟

西方へ精霊船やチャンコンと

焦る子に宿題まだか法師蟬

靴に露ザックザックと草に入る

おつきさまついてくるよと背なの吾子

二十六聖人の手は月を浴ぶ

月の駅企業戦士のちどり足

秋風に放り上げたるコッコデシヨ

秋風に放り上げたるコッコデシヨ

あきかぜにほりあげたるこっこでしよ

重さは一トンあるらしく、上には子供が4人乗ってそれを屈強な男たちが高々と座布団神輿を放り上げ緊張感がみなぎる長崎の秋祭り。姫路、「灘の喧嘩祭」のような勇壮な祭りで長崎で「コッコデシヨ」(太鼓山)とは、長崎くんちの出し物(奉納踊り)のひとつで全国的にあまり知られていないが鳥肌がたつようなものという。掲句のように神輿を放り上げるクライマックスを一度見たら激しく感動するとも。姫路灘の喧嘩祭や岸和田のだんじりとは違った興奮を憶えるという。それを知ったのはつくし俳句のおかげである。実際の場面を一度見て体験したい。同時作「爆竹の中一人曳く盆の舟」と言う光景も実際に見てみたいもの。

園児の味方 ◎ 磯野青之里

夏の果漁網の鉄鎖瘦せ錆びつ
 オクラ花子莢に突かれ落つる夕
 園児らをほめて応援運動会
 天高し進む下がるの鍬遣ひ
 芋の葉の風に揉まれど茎太し
 埴生の行き着く果てや芒原
 こほろぎや膝鋭角に込める意思
 長靴は園児の味方栗拾ひ
 つるり全身脱毛や衣被
 コーヒーは香りと苦味秋深む

つつじヶ丘抄

十三夜 ◎ 延川 笙子

隣家との狭き軒端の十三夜
 月白に自転車漕ぎ戻るかな
 岸荒ぶ北上川の秋出水
 虫送る大河端や橋の闇
 蝸やその日暮らしの男聴く
 柿色の目で柿啜るすずめ蜂
 人ならば百歳超えの目高飼ふ
 粧ひのまだ半なる一の谷
 秋風や無言の二人本の虫
 吾よりもコップはずつと汗つかき

長靴は園児の味方栗拾ひ

ながぐつはえんじのみかたくりひろい
 「長靴は園児の味方」だと青之里さん独自の捉え方。長靴は泥や水に強く、汚れても洗いやすく、また栗の毬を踏んでも安全であるから親にとっても有り難い靴といえようか。味方と、言われてみれば確かに強い味方。大人の長靴のように履いてあれこれ作業するものところが、車で言えば水陸両用車のようなもの。年中長靴を履いている子どもをみかけることもあったような気がする。もう一句、「衣被」(きぬかつぎ) は、サトイモの小芋を皮のまま蒸し、その皮を剥いて食べる秋の料理。その皮をつるりと剥くことからの連想で今流行の全身脱毛だとたえた。高齢になると芋がおいしく感じるという。その通り。

隣家との狭き軒端の十三夜

りんかとのせまきのきばのじゅうさんや

町中(なか)で十三夜を愛でるに相応しい軒端の光景。醍醐天皇が、月見の宴を催し詩歌を楽しんだのが、十三夜の月見の始まりではないかという説が代表的で、後の月、芋名月、栗名月とも。満月でなく少し欠けた月を愛でるのは日本人独特の審美眼で広い景色よりも隣家との間にみるに相応しいというのめさもあらん。笙子は独特のユーモアを含んだ句が上手い。また月白は「げつぱく」でなく「つきしろ」と俳句では言い、月が東の空に昇る際に空がだんだん明るく白んでくる期待の気持も指し、月見客が十五夜を待ち焦がれる思いが表現されている。日本語には様々な意味、読み、含みがあるので俳句は複雑で面白いと喜ぶ。外国人も。

西瓜の名残◎浜田久美子

潮の香のどこか懐かし秋麗

道行けば西瓜の名残り別府運河

火袋の古き眺めや秋の海

ひたすらに厨磨きぬ衣被

いつ来るか分からぬを待つ吾亦紅

吾子待つや駅に秋灯ともりゐて

向ひ合ひ博多秋鯖地酒かな

秋時雨語り尽くせぬ旅枕

吾子と行く博多ぶらぶら菊日和

野路菊や黒田官兵衛眠る地に

道行けば西瓜の名残り別府運河

みちゆけばすいかのなごりべふうんが

最近亡くなったアントニオ猪木の名言①この道を行けばどうなるものか。危ぶむなかれ危ぶめば道は無し。踏み出せばその一足が道となり、その一足が道となる。と名言を遺した。「道行けば」というフレーズは我々昭和の人間には「旅ゆけば」とか「海ゆけば」などのフレーズが大きく立ちふさがってくるが、それを正面から乗り越えようとする作者は強い。この句は別府運河の防潮沿いを歩いていたら、西瓜の未完の玉を見つけた。この西瓜は生まれた時が早すぎたのか、遅かったのか、と作者は考えさせられている。この句を読んだ読者も考えさせられている。「名残」の抒情が佳い。